

「実践教育ジャーナル」誌
Vol.17 No.3 抜刷り

特集1

特別講演

住まいづくり・ひとづくりは スクラムワーク

講師 建築家・「住まい塾」代表 高橋 修一氏

[司会 職業能力開発総合大学校 応用研究科教授 秋山 恒夫氏]



近年、本物のものづくりの衰退、伝統技能の継承の危機などが広く叫ばれているが、その背景には、これまでの住まいづくりや消費行動のあり方を良しとしてきた現代の風潮も大きく影響している。

そこで、今回はこれらの動きに異を唱え、豊かな住まいづくりをめざし、独自のネットワーク構築やこだわりの仕事を実践されてきた「住まい塾」代表の高橋氏をお招きし、実例の紹介や実践活動を交えながら、ものづくり哲学やひとづくりの方法について、示唆に富むお話を伺った。

(この特別講演は、2001年9月28日(金)、関東職業能力開発大学校附属 千葉職業能力開発短期大学校にて開催された「2001年実践教育研究発表会」において建築・デザイン系部門の特別企画として実施されたものです)

開 会

■司会 秋山氏

ただいまから建築・デザイン系の特別企画、「住まいづくり・ひとづくりはスクラムワーク」というタイトルで、建築家の高橋修一先生にご講演をいただきます。

高橋先生は「住まい塾」を設立され、約20年間、独自のネットワークで住まいづくりを実践してこられました。プロフィールにもありますように高橋先生は、東京理科大学を卒業後、同大学勤務を経て、独自の作風で知られる有名な建築家、白井晟一氏のもとで修行され、1983年に「住まい塾」を設立されました。「住まい塾」では、ユーザー会員（建築主）、賛助会員（施工業者・職人）、設計者（スタッフを含めた設計者集団）の三者が一緒になってスクラムワークとしての住まいづくりを実践され、現在まで約350棟（本誌発行時では約450棟）の住宅を手がけられてきたとのことです。

これは、トータルな家づくりの全プロセスにかかわる人たち全員のスクラムワークによって一つの家が出来上がる、という考えに基づくものです。つまり、設計者も、職人さんも、工務店も、お客さんも、一緒になって家づくりをするというものです。

この「住まい塾」独自の活動から、今後の教育訓練における一つのヒントがいただけるのではないかと、ということで高橋先生にご講演をお願いいたしました。

それでは、高橋先生をご紹介いたします。



司会の秋山氏

講 演

■講演 高橋氏

みなさんおはようございます。今日は「住まい塾」について、また住まいづくりの運動に取り組んでの20年間にいろいろと感じたことを、皆さんにお話したいと思います。

私は、住宅畑で育った人間ではありませんし、住まい塾を始める前に10年間いました白井研究所も住宅を中心にやっていたところではありませんでしたけれども、日本の住宅問題についてはずっと関心を持ち続けてきました。

●住宅問題とのかかわり

若い皆さんには記憶にあるかどうか分かりませんが、オイルショックの頃、あれは昭和48、9年ぐらいでしたでしょうか。あの頃は住宅の上にもひどい状況が生まれまして、だまされたの、ひどい建物を建てさせられたのと、そういう問題が頻発した時期でした。その時期、私が建築の仕事をしているというので二、三の相談を受けました。関係する不動産屋と、それからあの頃はひどい目に遭った人が大勢いたらしく、都庁にも専門の窓口が設けられていましたので、そこにも行ったりして事態を改善すべくいろいろ話し合ったことがあります。その経験を通じて、私はいろいろ考えさせられました。家づくりというのは、大体の人は一生に一度。しかも、30年近い長期のローンを組んで、そ



講演される高橋氏

う楽ではない返済をし続けるわけですから、一度失敗したらあとがないんですね。ひどい業者は業務処分を受けるわけですが、だまされたり失敗した人は、どうにもならないことが多いんですね。業者が処分を受けるといっても、それはほんのひとにぎりの業者で、別にそれで、買った人や失敗した人が救われているわけではないんですね。

その時、一般の住宅は建築の世界からではなく、ほとんど不動産の世界から供給されていることを、初めて知りました。建売住宅にしる、ニュータウンという大きな規模での開発にしる（最終的には建築の世界の人々がつくっているんですが）、供給源はほとんど不動産の世界なんですね。ですから、私は建築の世界で生きてきましたが、意外にも日本の一般的な住宅の実状については、ほとんど無知に近かったわけです。住宅ももちろんやっていましたが、今思えば非常に特殊な階層の特殊な住宅を設計していたという感じがします。そもそも設計者に設計を依頼して家をつくるといった形は、一般の人にはほとんど縁のないことだったのです。今はだいぶ事情が変わってきているようですが、かつては名の通った設計者はそれなりの住宅しか頼まれないものでした。私が住まい塾を始めてすでに20年が経ちますが、20年以上前の当時から、坪単価150万とか200万とか、そういった住宅をやっていたんですからね。

●住まいは、人間性をも変える

白井研究所というところは非常に特殊なところでしたので、経済的には大変でした。こうした大変さはかつては全く珍しいことではなかったのですが、それを覚悟して、みんな行くわけです。ですがまあ、好景気が続きましたのでアルバイトといった形でいろいろな仕事があった時代でもあったのです。ですから、経済的には困っても他でなんとか埋め合わせのできる時代であったのです。けれども、私は昼建築の修業をして、夜はつまらない建築のアルバイトをして収入を得るといのは、妙な形だと思ったのです。そこで、「ここにいる間は建築のアルバイトは基本的にしないようにしましょう」と心に決めました。途中まではそれまでの貯え等で何とかりましたが、それ以後が大変でした。その後どういう生活を送ったかと言いますと、昼、研究所で建築の仕事をしませぬ。昼といってもそこは非常に変則

高橋修一氏のプロフィール

- 1947年秋田県生まれ。東京理科大学卒業。同大助手、白井晟一研究所を経て、1983年「住まい塾」設立。家づくりにかかわる関係者の相互理解と共感をベースに、一体となった住まいづくり運動を展開。（約450棟完成。ユーザー会員1,500名、賛助会員100社、設計者23名）
- 「家づくりは、建主・設計者・施工者のスクラムワーク」「住まいの豊かさは、相互の充実の上に成り立つ」が信念。そのために、おのおのが学び、高めあう場として、施主（定例勉強会・定期セミナー）、設計者（設計者養成塾・定期強化合宿）、施工者・職人（定例研究会・研修会）の各勉強場を活動の3本柱とし、その中心に実際の創作プロジェクトを据えて活動。
- 無垢の木材や左官技を駆使した、長持ちのするシンプルで独特な作風の住居を設計。職人に腕を磨いてもらうために、「本物のこだわりのある仕事の機会をつくり出すのが設計者の役目」とも主張。
- 「住まい塾」東京本部：埼玉県志木市
大阪本部：大阪府豊中市
(他にOBが各地で活動)
- 著書：『運動としての住まいづくり——「住まい塾」と「家づくりの会」』（『住宅建築・別冊』、建築資料研究社）
『知的住まいづくり考』（TBSブリタニカ）

的なところでして、昼の12時から終電がなくなる夜中の12時までが仕事時間で、夜中の12時を回ってから翌日の昼までが空いているわけです。私は、白井研究所というところに10年いましたので、その中盤頃からですから今から恐らく25年くらい前の話になりますが、何か自分の体を張ってする肉体労働が最も純粋なんじゃないか、とその当時、思ったんですね。どうしてそんなふう思ったかは分かりませんが、全く建築に縁のないお中元やお歳暮の配達、朝のアルバイトニュースの配達、それから夜中に道路の土を掘ったり、洗車場へ行ったり……と、そういうことを随分やった時期がありました。別にそこで何かを得ようなんて思ったわけではありませんけれども、その時期の経験を通じ

て得たことが、期せずして大きかったのです。恐らくあの時期の経験がなかったら、「住まい塾」の設立には結びつかなかったのではないかと今思うのです。普通的设计者が歩むように、事務所を出たら自分で独立して、それなりにやっていくという道を歩んだと思うのです。そういう妙なことをしたものですから、山谷の労働者たちと交流ができたり、配達では杉並区が担当でしたが、お中元・お歳暮の時期には、午前配達、午後は美術館や坪150万とか200万といった住宅を設計している状況にあったわけです。配達の仕事をしていると、豪勢な家からつけんどんで冷やかな人が出てきたり、貧しそうな家からは人情味のある人が出てきたりして、そういう経験を通して……これは極めて個人的な経験ですけれども、その時に「豪華な家というのは、人間を良くするよりも、かえって悪くするのではないか」と、そんなふうに思ったのです。

こうした予期せぬ経験が「住まい塾」というものに私を結びつけたんじゃないかと思えますね。ああした経験がなかったら未だに特殊な建築を設計したり、チャンスを求めたりしていたかもしれません。あの頃すでに、どうもそういう豪華版に対する興味をなくしたんですね。別にやりたくなくなったというわけではありませんが、特別に条件の整った予算のたっぷりあるような、そういう住宅をやりたいという気持ちは薄くなりました。これは振り返ってみてそう思うのですけれども……。

●貧しい日本の住宅

経済的には金持ちになった国と言われますが、日本の住宅は今でも非常に貧しいと思いますよ。どう貧しいかと言いますと、狭いとか、非常にお金がかかって入手困難だとか……そんなこともありますけれども、私が最も日本の住宅で貧しいと思うのは「空間の質」という点においてです。小さいければ小さいりの質というものがあるものですが、小さいに始まって高い、しかも空間の質がどうにも悪い。ほればれするような空間にめったにお目にかからないでしょう？ それで、結果的には今の日本の住宅の平均寿命は、だいたい20数年と言われている。データを見てもいいところ25年です。だからローンが終わらないうちにたいがいの家は消えてしまっているということになります。皆さんが生まれてまも

なく建った家が成人した頃には大半がなくなるという、そんなひどい状況になっているわけです。こうした状況が我々の日常生活、もしくは精神生活にどんな影響を与えているかを考えると、私などは空恐ろしい気がしてきますね。

大体の人は30年ローンを組んだりしますから、20数年で建て替えるとなりますと、ある時期は2棟分のローンを払うことになります。前のローンを相殺して返さなければいけませんから、実際には一棟分のローンを支払っている形にはなっていますが、実質的には10年近く二棟分のローンを支払い続けるわけです。こんなことから、高い上に日本人の「住むことに関してかかる費用」がさらにかさむのです。それに、20年ちょっとで壊されるような質の空間に身をおいて、そこで人間として、あるいは家族として、健全な生活が営まれるのかどうか、健全な感覚なり、情緒なりがそこで育まれていけるのかといったことを考えますと、日本の住宅というのは根本的に方向を変えなくてはならないと思うのです。どこを、どんなふうに変えたらいいのか、またどういうふうにしたら変わるのか、ということが具体的に問われているのです。20数年サイクルで、ものすごい量の住宅が壊され続けているわけですから。建設量をみると日本という国は、やはり経済的に豊かな国なんだなあと思うのですけれども、それにつれての建て替えの量。建て替えるという響きはいいですけれども、壊されて建つわけですから産業廃棄物扱いのゴミがたくさん出る……こうして住宅の問題は単なる住宅問題に止まらず、ゴミ問題からなにか絡んでくる。ゴミ問題が、今度は環境問題に絡んでくるのです。住宅というものをもっと広範囲な問題として捕らえて、それで家づくりに臨むようにな

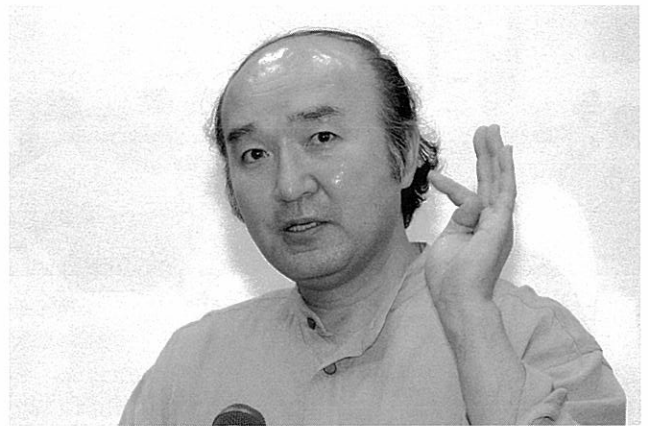


らなければ、これはただ、間取りがいい、形がいい、安い、高い、早く欲しい、というようなつまらないことにごろごる終始して、結果的には25年も経ったらみんななくなるというような事態を続けていくことになるんですね。

●貧しい状況を変えるには、家づくりにかかわる「全ての人」が変わらねば……

今、「住まい塾」は基本的にどう考えて取り組んでいるかと言いますと、こういう事態を招いたのは一体誰なのか、とまず考えるんですね。これは今日の講演の案内にも書かれてありましたが、今はすぐ「時代の風潮」なんて言いますね。しかし、風潮というのは風や潮が運んでくるものではなく、やはり人間がつくり出しているものなんですね。一人がつくるわけじゃあもちろんありませんが、人々なり、かなり大勢の人間がかかわって状況というのは生まれてくるわけで、あくまで人為的なものですね。人為的なものなんですから、何か変えていく糸口が人間の中で生まれるはずなんです。社会状況とか言って、それを逃げ口によくしますけれども、私は基本的に時代の状況というのは人間がつくりだしたものなのですから、なかなか手だてが見つからないとは言っても、じゃあどうすりゃ変わるんだ、人間の手で変えていくしかないじゃないか！と、そう思うんですね。日本の住宅のこの貧しい現状をどうしたら具体的に変えていくことができるのか。この一つの私なりのやり方が「住まい塾」という形での活動になっているのですが、私はこう考えているんですね。とにかく「貧しい状況を生んでいるのは、それにかかわっている人々全員の責任だ」ということ。

これは議論の余地のない紛れもない事実なのです。住宅をつくる際にどういう人がかかわっているかと言いますと、基本的には設計者、施工業者、それに連なる職人たちがたくさんいるわけですが、そういうつくる側の人たちと、それから家を求める人……「建主」と言ったり、「クライアント」と言ったりしますが、つまり家を建てたいと望む人たちがいます。実際はもっと複雑ですが、住宅が生まれるには、大きくはこの三者が必ずいるわけです。欲しいという人、設計する人、実際に形につくり上げる職人集団。この三者が具体的にかかわっているわけです。



●自覚のない責任者

ところが私の経験から言いますとこの貧しい現状を生んでいるのは誰かと職人たちに聞いても、自分たちのせいだと思っている人は、あまりいませんね。設計者も「自分のせいだ」「自分たちのせいだ」と言って胃を傷めているような人は、あまり見たことがありません。それから、家を求める人、この人たちは大体、この貧しい現状を生んでいるのは「つくっている人たち・あなた方」だと思っている。そうすると、責任を感じている人は、「日本のどこにもいない」ということになります。これが現状で、恐らく改善・改革に向かわない一番大きな原因でしょうね。要するに、「自分が原因だ」と誰も思っていないのですから。

それから、「こんなことでは、いい住宅は生まれるわけがない」と思われるのは、かかわっているこの三者、この人たちがこれまでどういう住空間に住み、かつ今住んでいるかを考える時です。

設計者ですから「人がうらやむような空間に身を置いて生活をしているか」というと、そうでもなく、私の知る限りかなりひどい生活をしている人が多いですね。しかも平気だ。仲間うちでもこの話をよくするのですが、設計者がこんなひどい生活をしていて他人の家を設計するなんていうのは「罪づくりだ」というぐらいに私は思うのです。別段りっぱな家に住んでいる必要もありませんが、その中で営まれている生活そのものが、ぐちゃぐちゃに物はあるは、いい物を選んで使っているわけではない、ロクな空間に



住んでいないという人が多いんじゃないでしょうか？

もう一つの、工務店主なり、建設会社の社長・現場監督それに連なる職人集団、この人たちとも私は、これまでかなり多く接してきましたけれども、この人たちもまたあまり褒められた生活をしていませんね。こんな生活をしていたんでは、「センスのいい人に住宅を頼まれたら、対応できないだろう」と思われるような生活を、平気でしていますね。経験を積んだベテランの人たちはこの世界にはたくさんいるのですけれども、つぶさに一人ひとりの生活ぶりを見ますと、こういう生活をしている人たちが寄り集まって家づくりをしても、「まあ、間違ってもいい家にはならないな」と思わせられることが多いのです。設計者にも、施工業者・職人にも、生活センスの面で重大な問題があるのです。

一方、家を依頼するほうも、「いい家をつくるのはあなた方じゃないか」と言ってみても、望む方が「いい生活センス」なり、「いい要求」をしなければ、まず、いい家にはならないと考えた方がいいですね。「赤いのが欲しい」と言う人に白をもって応えるわけにはいかないんですから。やはり求める人がいて、それに応えるという形で出ていくのが住宅ですから、そこは絵や彫刻などの純粋芸術とはちょっと違うところですね。提案に対して「OK」と言うか、あるいは「NO」と言うか、その辺の共感関係で物事が決まっていくわけですから、建てる人がどういう「望み」を持ち、現在どういうセンスを持って生活しているか、どういう価値基準を持ち、判断基準を持って生活しているか、これは家づくりにいろいろな形で深い影響を及ぼすわけです。ですけれども、建主はそういうふうには思わない、と

にかく自分たちの望みを言って、「それを聞いて、かなえてくれるのは、あなた方だ」という感覚を持っていますね。

各々にどれくらいの比率で責任があるかは分かりませんが、かかわってきた人たち全員が、みんなこの貧しい状況を生んできた責任者なのです。設計者も、施工業者・職人集団、それに建主も。ですから、この三者が変わらなければ住宅は変わっていかない、と私は考えるのです。これは非常に遠回りのような話ですけれども、とにかく今、日本は土壤が非常にやせているというか、物が生まれる、あるいは人が育っていく上に必要な土壤が非常にやせてしまっている印象を受けるのです。経済という吸引機のようなものがあって、長い間にその吸引機で養分をみんな吸い取られてしまって、なにか「非常にやせた土地になってしまったな」という感じがするのです。土壤の土壤たる人間が変わらなければ、何事も始まらないのです。

● 「住まい塾」の運動

今述べたように、「住まい塾」の基本的な立場は、「貧しい状況をつくり出した責任は三者全員にある」ということです。「そこが変わらなければ、住宅の状況というのは変わっていかないんだ」「変わるためには何をどうしたらいいか」……この考えに基づいて具体的な活動が組まれています。設計者には「設計者の養成塾」とか、私もスポーツをやりましたからそんな発想にすぐ結びつくんですが「強化合宿」とかを繰り返し繰り返しやっています。

それから、建設会社、職人、その他ここにはたくさんの方の職種の人が連なってきますが、具体的につくる立場にある人は年一回二泊三日でかなりの人数が集まりますけれども、「研究会」と称して設計者と施工業者・職人との意見交換の場として、具体的な活動テーマを決めながらずっとやってきています。

それから、肝心の建主も、ただ「注文してお金を出せば家が出来る」などと思ったら大間違い、やっぱり自分たちの「要求の貧しさ」も「この貧しい住宅を下支えしてきたんだ」ということに気づく必要があります。10月ぐらいに来て、「来年の3月までにはどうしても家を完成させたい」といった類に始まって、今はいろいろな展示場やら何やらがありますから、「これを『よし』とする」か、「こういう

ものは『私は絶対にいやだ』と言う」か。使う素材に対してもそうですね。とにかく「決める」「選択する」のは、まず最初にはその人たちなので。その選択の第一歩を誤まれば、おかしなものが出てくるのは当然ですね。その辺の「選択する目」「感覚」「自分の判断基準」といったものをもう一回掘り返して学んで、その上で家づくりに臨むことが必要だということで、定例の「勉強会」を月一回、20年間、東京と大阪で繰り返しやってきました。家づくりのハウツーといったものは知ろうと思えば世の中にくらでもありますから、そんなことよりもここでは「なぜ家をつくるのか」、それから「日常、身を置く空間というものが、どれほど大切なものであるか」「どういう影響を我々に及ぼすものか」といったことを中心に学ぶのです。

以前、ゴミ問題に取り組んで、その中心的活動をしている人の家に招かれたことがあります。私はその家を見て、こう思ったのです。

「あなたが今問題にしているそのゴミ問題は、まさにあなた自身が生んでいるのだ！」

こういう人ですら20年もすればもう取り壊されておかしくないような家を平気でつくり、それに気づかずに住んでいるんですね。これは経済的な問題では全くなく、生活文化の問題、生活に対するイメージの問題なのです。

このように、「社会的な問題」と「自分の日常生活」とが分裂してしまっている状態が大きな問題で、本当はその原因を自分自身がつくりだしているのに、あたかも他人がつくっているかのように批判して、自分は引いて眺めているというような状況をよく見かけるのです。

● 「住まい塾」の4本柱

職人の問題にしても、「職人のなり手がいない」「職人の技術がどんどん衰退していく」と、これを嘆く人はたくさんいます。ところが以前から繰り返し繰り返し指摘されながら、効果が上がらない。なぜですか？ 私にとっての具体的な「問い」は、ここなんです。

「職人のなり手がいない」「職人の技術が衰退していく」、これを悲しいことだと嘆くならば、嘆くその人のつくった家は「職人が育つような家であったかどうか」「職人技術を喚起するような性質の家であったかどうか」「職人にな

りたい、あるいは後継者を育てたいと思わせられる家であったかどうか」……もしこの問いに窮するようなものであったなら職人はいったい、どこでどう育つのですか？具体的に「その場」がなければものづくりは育ちようがないのです。

こうしたことに気づかないから、さっき言ったようなゴミ問題に非常に熱心で、日本のゴミ問題にいろいろな意見を述べながら、自分がつくる家はゴミ問題の対象そのものだったりするのです。20年も経たないうちに飽き飽きして、また家を壊し、つくる。ですけれども、当人にはこの社会問題は自分が生んでいるのだという自覚がないのです。日常生活の中で「社会の状況と一つひとつの自分の選択は、重なっているんだ」ということをもっと自覚していけば、恐らく何かが変わっていくだろうと思うのです。そういう思いの中で我々の活動は組まれています。設計者が向上するための活動「設計者養成塾・強化合宿」が一本の柱、職人、建設会社それから、ものづくりにかかわる人たちの「研究会」がもう一本の柱、また、建主が学び、自分の中に持っているものをもう一度再確認して、それから家づくりに取り組むということでやっている「勉強会」がもう一本の柱、この三本の柱で囲まれるように、真ん中に芯柱のような形で我々の「ものづくり」があるというのが、住まい塾の基本的な考え方なのです。

ただただ真ん中を変えるんだと言って大騒ぎしても、構成する周りの三つが変わらなければ、これは具体的に変わらないのです。人間が変わらなきゃあ、何事も変わりませんよ。自分に責任があると思わないから自分が変わろうとしない。自分が変わろうとしないで、いつまでも他人事な



んだ。

スライドを見ながら…

これから少しスライドを見ていただいて、その後、もう少しお話したいと思います。これから皆さんにお見せするのは、今日のテーマにかかわりのある家づくりの中で、特に思い出に残るものを2件ピックアップしてきました。

●年月の経過で味わいを増す自然素材



これは林の中ですので外観が撮りにくいのですが、茨城県の鬼怒川べりに建てた金属作家松岡信夫さんのギャラリー兼、別荘のようなものです。家は基本的には自然素材で出来ています。今は自然素材、自然素材とよく言われますけれども、そんなこと大騒ぎするような話ではなく、ごく当たり前の話です。健康住宅などと言って大騒ぎする時代ですからね。他は不健康住宅かってことになりますから、そんなことで騒ぐような時代は早く終わってほしいと思いますね。

基本的に構造をまずしっかり作り上げて、時間の経過に耐えない、要するに時間が経ったらダメになっていくような素材は使っていません。年月が経てばそれなりの味わいを増していく、そういう素材を中心につくっています。経年変化で味わいが増していくように木部塗装も、クリアラッカーとか、ウレタンといったたぐいの皮膜を作る塗装は住まい塾では基本的に使いません。ほとんどの木は浸透

性のオイル拭きです。

●工芸家との合作で出来たドア



これは玄関へのアプローチです。向こうに見えるのはかなり大きなドアで、アーチ状になっています。この建物には、いろいろな工芸家が参加しています。今は忙しい時代になって、建築というと、設計者が設計したらすぐ施工業者に渡して、そそくさと出来ていくというような時代ですけども、本来、建築というのはもっともっと広範な人が参加して作り上げられる世界なのです。かつて建築は「総合芸術」だと言われたのはそういうことですけども、今は「総合商品」といったようなものばかりになりました。ここのドアは非常に大きいので市販の丁番ではほとんど間に合わないのです。ですから、この大振りの丁番は、鉄の工芸家が鍛造（たんぞう）という技術で、鉄をたたいて打ち出して作ったものです。それから後で出てきますが、ドアに楕円形にくりぬいたガラスは、ガラスの工芸家で作ったものです。その他、照明器具などもただ市販のものを選んで取り付けるというのではなくて、ブラケット、コードペンダント、スタンドとたくさん作っています。この住宅は、その工芸家の別荘でもあり、かつギャラリーでもありますが、その後、木工家の作品もだいぶ入りました。恐ろ

しいことに今日ではごく普通のことになってしまいましたが、建築というのはそんなにそそくさと2ヶ月、3ヶ月で慌ててつくるものではない、という意味で、このスライドを準備しました。

●自然と調和した世界



よく見えますね、丁番が。右の方は和室と呼ぶには少し抵抗がありますが、畳の部屋でぼーと明かるくなっているのは、小さなスタンドです。他の照明も含めて松岡さんが、ガラスの工芸家と一緒に作ったものです。ここは自然の豊かな所ですので、建物が建つとどうしても樹々がなくなってしまいます。工地上、伐採しなければならぬ樹々が結構でてきますので、その後修復するのにこれまた造園家と建築家との息が合わないと調和した世界が出来てこないのです。野草の好きな造園家と建主と意見をいろいろ交わしながら、元々ここにあった自然の風情をもう一度回復するように作り上げたものです。

ここでちょっと構造の話をしておきましょう。我々の構造に対する考え方は大体決まっております、この建物の場合には中二階方式なので厳密には通し柱とは言えませんが、主だった柱は大体7寸～7寸5分、センチで言いますと21cm～22.5cm角の柱を二間ピッチで使うようにしています。標準的な総二階建て40坪の建物となりますと、この太い通し柱が計12本使われることとなります。



この写真でよく分かりますね。楕円形のガラス、丁番、それから引き手。市販のいくらいい金物屋さんの丁番でも、「こういう重さのドアには使えません」となって、こうしたものは工芸家の協力を得ないと、このドアのデザインそのものが不可能になるというわけです。

●いいものを見て、本物に触れることが大切



これは、ドアを開けて中から外を見たところです。照明器具も、みんな特別に作ったものです。いつでもこんなわけにはい

きませんけれども、数カ月で家を完成させるようなスピード時代ではなんだかみんな簡単になりすぎて、分厚いカタログを持ち出してはそこから選ぶといったことになりました。それにつれて建築の世界は工業製品のアッセンブリーのような非常に味気ない世界になりましたけれど、建築は本来そんなものではなかったのです。こういうその場その場に合わせたつくっていくような世界に接しますと生活する方も感覚的に解放されてきて、そんなことをこれまで考えてもいなかった人が「やはり、いいなあ」となって、また訪ねてくる人の中にも「私もこういうものにしよう」という人が出てくる。潜在的な可能性はみんな持っていますし、設計者もそうです。若い人たちもこういうものづくりの世界に接しないで、ただただ、出来ているものから選ぶ行為にばかり終始していると創造性が委縮したまま開けていけないという感じがします。

建主もいいものに接すれば、ぱっと可能性が開けていくのに、接しないと開けないのです。ですから、本とか話とかだけではなくて、設計者も施工業者・職人も、それから建主も、いいものに全身で直に触れるということが何よりも大切です。それをしないと建築の本質が理解されないし、建築も本当に変わらないという感じがします。

●セメントを混ぜた叩きの床

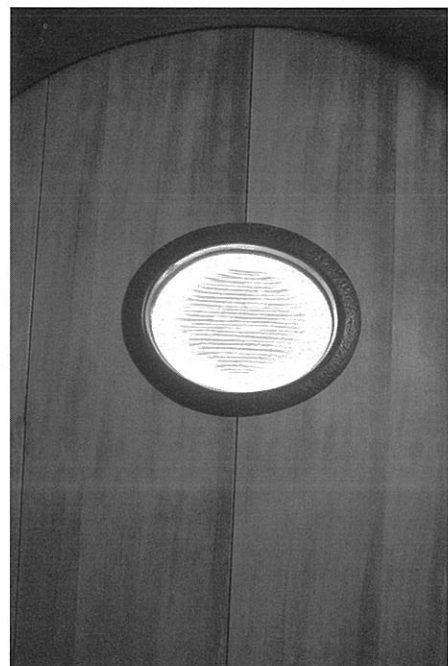


ここの床は、昔でいう土間ですが、時代がだいぶ変わりましたので、昔の土間のように土をたたいて固めるというだけでは不足なのです。ハイヒールで来る人がいたりするとボコボコになって具合が悪いので、昔の「叩き（たたき）」

に少しセメントを混ぜています。セメントを混ぜるとグレーンっぽくなりますので、色の調整をして固めています。ですから、見たところはほとんど昔の「叩き」のようですが、素材が少し違ってきます。

右側壁面のブラケットとその下の小さな棚なども工芸家が作ったものです。

●「挑戦」で出来たドア

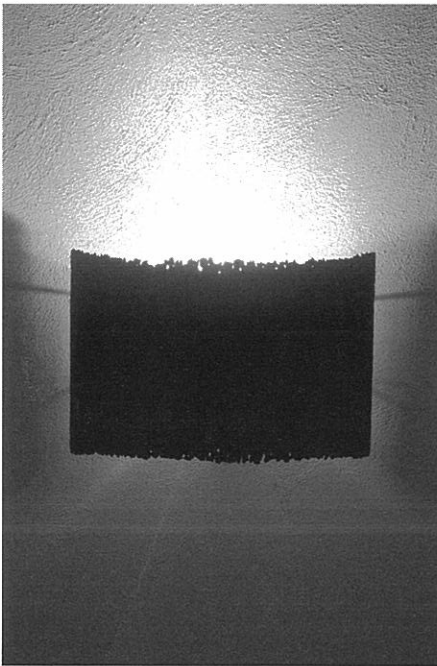


これは、ドアについての明かり採りのようなものですが、枠を鉄の工芸家が作って、中のガラスはガラスの工芸家が作りました。こういう人たちが建築と絡まないと、工芸家は工芸家で単独の作品を作って楽しむという世界にどうしても終始してしまいます。工芸家が一緒にやることを望んだとしても、建築の設計者の方が迎えられる場をつくっていかないと、そういう人たちとの連携の場も育っていかないので、このドアの場合、建具屋さんだってこんな大きなアーチ扉など作った経験がないのですから、建具屋さんに向かって「狂ったら保証してもらいますよ」などと言ったら、これは誰も作りたがらなくなります。建具屋さんには作ること自体が挑戦なわけですから、建具屋さんには「狂っても、割れても、文句は言わない」と言って、やってもらいました。これは、注

文する側もそうです。「大きくて立派」はいいけれども、「狂ったら保証してもらいます」などとケチなこと言っていたんでは、みんなおじけづいて作らなくなります。

ですから、そういう作れる状況をつくっていくのも、設計者の大事な役割だと私は考えています。

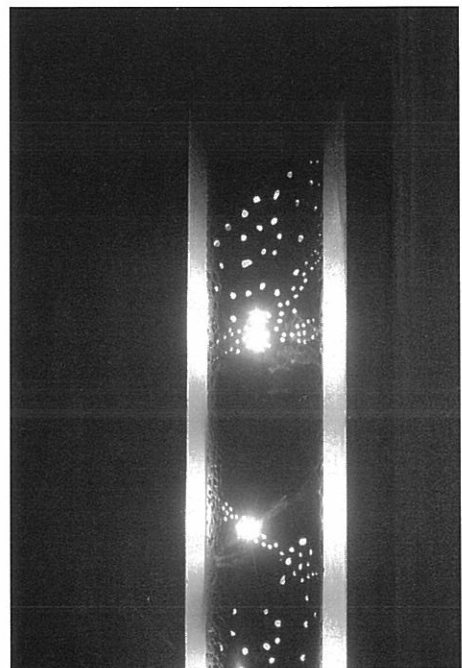
●「ざらん」と仕上げた漆喰の壁



これは、さっき壁に付いていたブラケットです。鉄をたたいて、へりを少し破れかげんにして作ったものです。壁は、漆喰（しっくい）です。日本の漆喰は金属のコテできれいに平滑に仕上げるとするのが一般的なのですが、私はどうも昔からあるあの漆喰は自分の建築には冷たすぎて、それに色合いも純白ではなくアイボリーがかったソフトな感じがほしいんですね。漆喰がベースには違いないのですが珪砂（けいしゃ）漆喰と言いまして、珪砂という特殊な砂を漆喰に混ぜて、コテも金属ではなくて木ゴテで、「ざらん」と仕上げてあります。日本人は腕のいい職人ほど、この「ざらん」と仕上げてくれ、と言うと“ハァ？”といった顔をするのです。まあ慣れれば、やはり腕のいい人の方がいいんですけども、平滑に仕上げるとか、真っ直ぐに揃えるというのが、腕のいい職人の規範みたいになって

きましたので、ラフにとか、ざらっととかいうのは左官屋さんにとって感覚的につかみにくいんでしょうね。昨日まで平滑に塗れ！と言われて続けてきたんですからね。ですから、塗るときには付きっきりで、「もっと大きくコテを回して」とか、「鼻歌を歌いながら塗ってくれ」とかいろいろ言いながら塗ってもらうわけです。何度も繰り返していると、付いていなくても、いい調子に仕上がるようになります。

●いいものに触れると世界が広がる



これも照明です。鉄板を打ち抜いて作ったものですが、何で打ち抜いたものやら、きれいにバランスよく穿つものですね。



これも照明で、ブラケットです。蛍イカか、電気クラゲを連想させますけれども、淡い光でとてもきれいです。ガラスと鉄の組み合わせで出来ているものです。こういうのを見ると、まあ中には「暗くていやですね」と言う人もいますが、「今まで見たことがないけれども、いいですねえ」と言う人もたくさんいる。こういうものに触れる機会を得ると、その人の感覚世界がどんどん広がっていきます。こういう経験の積み重ねで灯りの世界の状況も徐々に変わっていくんだと思いますね。「日本の照明は貧しい、貧しい」と10年言い続けたとしても、何が貧しいんだか分からないんですから大して何も変わりません。具体的に接



すれば「いいなあ」と感じる人が出て、「いいなあ」と感じた人は「私も使いたい」となり、そうなる「作り手の世界も広がっていく」、まあ、そんなふうにして「物事の事態というものとは変わっていくんだ」と思いますね。

●リビングとキッチンで自然な会話ができる工夫



これは、建物の内部です。私はここで初めて試みたのですが、なかなかいい生活のスタイルだと思って、割に最近頻繁にやるのですが、みんな座る生活からイスの生活になって、それもまた狭い日本の住居の中で、なかなかなじまないという状況をずっと続けてきたわけです。ソファを置くには狭いし、置いてもなんだかなじまなくて、長いうちには背もたれにして使っていたりする家がたくさんあります。ここには座布団を置いてありますが、テーブルの下は掘り込んであって、足が下ろせるようになっています。カウンターの向こうはキッチンですが、こちら側と比べてほぼ50cm、3段下りようになっています。キッチンに立っている人の目線と、こちらに座った人の目線に、あまり差がないようにしてあるのです。それから、キッチン側の人はイスを置いて座ると、こちらの座布団に座っている人

とほとんど同じ高さになって一緒に食事や会話もできる、という構成になっています。このスタイルは今の日本人にはなじみがいらしく、このスタイルを見て気に入る人が多いのです。真ん中の柱は、確か30数cm角のものを八角形に削り出したと思います。

●プロには出せない味わいのテーブル



奥隅にある暖炉、それに上から下がっている照明もこの建築のために作ったものです。私がこういう話をすると、皆さんすぐ言うのは「そんな、照明器具を特別に注文して、ずいぶん高いものになりゃしませんか？」と、たいがいそんな反応をしますね。ですけれども、これは驚くに当たらないんです。手の込んだものを作ればそれは高いですけれども、これはちょっとした既製の照明器具より安い。一灯1万5千円ぐらいだったと思います。ですから、ごく普通に使えるんです。こちらの手前にある少し黒ずんだテーブルは胡桃（くるみ）の板ですが、松岡さんは鉄を中心とした工芸家ですけれども、木も好きで、どこかで出たときに買っておいた物をここに使ったのです。表面の加工も大工さんがやったわけではなく、素人が小さな丸ガンナでコン

コン、コンコン削ってさらにサンドペーパーで磨き上げたものですから、プロには出せない味わいあるテクスチャーのテーブルになっています。

●設計者と工芸家が意見を交換しながら作る



ちょっと、テーブルの感触が分かるでしょうか。上からつるした照明もここに合わせて作った物です。こういうのも設計者が、ただ「ここに照明器具を」と言って作るわけではなく、設計者と工芸家が意見を交換しながら作っていくのです。当初、ここに照明器具を作りたいと言ったときの工芸家の案は、横長の照明を天井に直接付けるというものでした。天井に直接付けてしまいますと、横長だけに天井の連続性が切れてしまい、空間的な伸びやかさが失われてしまうのです。また、カウンター上が視覚的に抜けすぎていて目線に近いあたりに障害物があった方が、キッチンとリビングの関係が少し縁（えん）が切れた感じになっていいのです。そこで、照明はワイヤーでつり下げよう、ということになりました。このへんに、設計者と工芸家とが意見交換しながらものを作っていく意味があるのです。任せてくれればその方がいいという人もいますけれども、「人のかかわりの中で出来ていくのですからお互い意見交換して、自分一人では考えつかなかった物が出来ていく方が楽しい」とこの人は言うのです。それに我々の仕事は最終的には空間をつくるということに集約されていくわけですから、そのことを忘れずにそれぞれ立場の違った人間が意見交換して、刺激し合って、それで出来ていくという

のが一番ものづくりのかかわりとして、自然なことだろうと思います。

●木は汚れが付いて味わいがでる



キッチンカウンターも、テーブルカウンターも全部、木です。「木のカウンターでは腐るんじゃないか」とか、「汚れるんじゃないか」とか、いろいろと心配する人がいるのです。皆さんは建築の設計にかかわっている人かどうか分かりませんが、「汚れませんか」と聞かれたらどう答えます？ たじたじですか？ 私はこれまでさんざん聞かされましたから、「汚れませんか」と聞かれたら「汚れますよ」と答えます。今は、どうも汚れるのをいたく嫌う傾向にあります。汚れもまた「味の内」という感覚が必要ではないかと思えますね。「汚れが全く付かない」というのは味わいが全く出ませんと言うのと同義なんです。汚れをそのままにしてちゃあ、そりゃダメですよ。汚れるのを毛嫌いするのではなく、ただ清潔に手入れしていくことが大切なわけです。人間だってそうじゃありませんか。汚れっ放しじゃねえ（笑）。「腐りませんか」と言う人には、腐るほど放っておく方がよっぽど悪い、と、こう言います。これで万事支障なしです。

柱は北米カスケード産の松で、カウンターは日本の胡桃、床は樺桜（かばざくら）、これも日本のものです。これらは全部、無垢ですけれども、今、無垢材というところも恐ろしく高く使えない、と思込んでいる人が多いんですね。ブームに乗じて高く売っているところもありますけれども、

昔から供給しているところではそんなに高い物ではありません。ちなみに、この樺桜のフローリングは、乱尺で寸法もまちまちですけれども、坪当たり大体、1万4、5千円です。貼り物の安い床材でも、今それぐらいはするでしょう。ですから、物に直に接して、使う方も現実に入手できるルートを探しておけば、そんなに使うに難しいことはないのです。

ハウスメーカーと契約して、もうすでに着工してしまっている人が、我々の勉強会に来て非常に残念がっていたことがありました。後日、『床だけは無垢の物にしたい』とハウスメーカーの営業マンにお願いしたら、『坪15万円はかかりますよ』と言われ、そんなに高いものなんですか？と電話がかかってきたことがありました。知らない人に対して知らない人がしゃべるんですから、こんな話にもなるんですね。

●燃やして楽しむ暖炉



これは、キッチンに立ってリビング側を見たところです。暖炉も「本当に燃やせるんですか」と、聞く人が結構多い。燃やせない暖炉って……燃やせないものは暖炉とは言いません。（笑）これはちゃんと薪や林から拾ってきた枯れ枝を燃やせます。薪を入手するのはそう簡単ではありませんが、これもルートさえ見つけておけば安定供給できます。楽しんで燃やす程度なら材木屋さんにでも行けば、木っ端がただでいくらでももらえますから、何ら不自由はないのです。

●建築の空間と一体となって作る家具



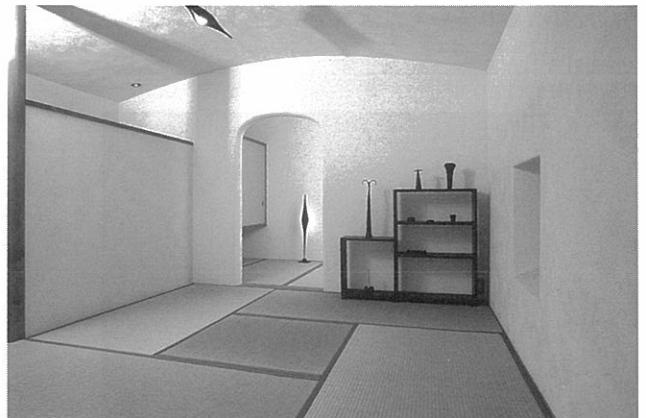
建主の松岡さんは自ら工芸家であり、私の仕事仲間でもありますけれども、こういう試みをやったのです。このスライドにはまだないのですが、例えばイス・テーブル、その他の家具を選ぶときに、建物が出来てから設計者なり、住み手が、「ここに合う物はないか」と探して、買うあるいは注文するというのが普通のやり方ですね。ですけれども、松岡さんはこういう思いを抱いたのです。

工芸家は通常、建築空間というイメージを持たないまま、自分の世界で一品一品作るという感覚で育ってきていますから、「建築空間の一要素として調和する世界を作るんだ」という感覚を持っていない人が多いですね。『この建築、この空間に合う家具を作る』という逆のあり方もなきゃならないんじゃないか」という思いから、建物が出来てから何人かの木工家に集まってもらい、それを試みにやってみたのです。空間に触れ、そこからイメージしてもらおう、という試みだったのですが、この試みは成功しませんでした。

しかし、この試みは非常に大事なことであったと思うのです。そういう習慣がなかったということもありますし、工芸家にはそれぞれに個性がありますからこの建築空間に

調和できる人、できない人がいたということもあったでしょう。ただ、この試みには非常に大事な要素が含まれていて、工芸家は自分の工房で「自分が作りたい、自分が美しい」と思う作品を作って、それを「良し」とする人に「買ってもらう、選んでもらう」という方向だけで果たしているんだろうかという提示でもあったわけです。この提示が重要なのは、いったい我々の仕事は何なのか、建築家は建築のことを考え、木工家は木工のことを考える。金属作家は金属のことを考え、画家は絵のことを、彫刻家は彫刻作品のことを考える——それはまあ当たり前のことですが、我々はそれぞれにもっと高次の、空間という形における調和の世界をつくり出す役割を担っているんじゃないか。ここでの試みは失敗に終わりましたが、各分野が分裂状態から脱して空間という要素の中に総合されていく必要性を提示した第一歩として重要だったのです。

●天井も壁も全面が漆喰



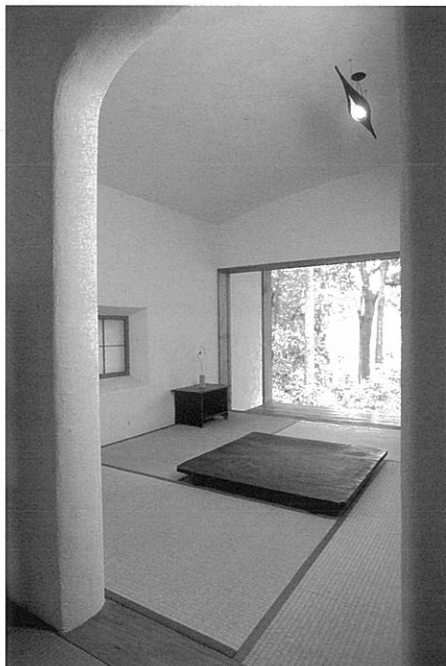
さて、これは畳の部屋で、壁・天井共に、漆喰で塗り回してあります。漆喰というのはほとんど乾いて水が引いていきますし、塗り継ぎがうまくできないのです。生乾きのうちに追っかけ塗っていかないと収まりのつかない素材ですので、こういう、壁から天井までつながっているようなものを左官屋さんは嫌がるのです。「どこかで見切りを入れてくれないか」と左官屋さんは言うのです。しかし、やればだんだん工夫もし、うまく出来るようになるものです。「大変だ、無理だ、と言われて設計者がすぐ引っ込んでいたら、左官屋さんの腕も

鍛えられないじゃないか」と言う左官屋さんは笑いますが、育つにはこういう人の関係も大事で、個人の努力というだけでは不十分ということを感じます。

ブツブツ言ってたくせにこれで自信をつけた左官屋さんは、住まい塾以外の仕事でも、あちこちでやるようになったりするんですね。(笑)

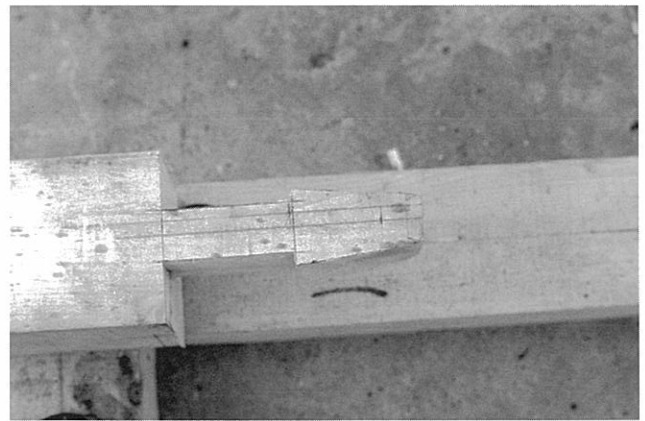


これは、南側の開口部から庭を眺めたところです。樹々がうまく修復されていて、自然な森を感じさせていいですね。



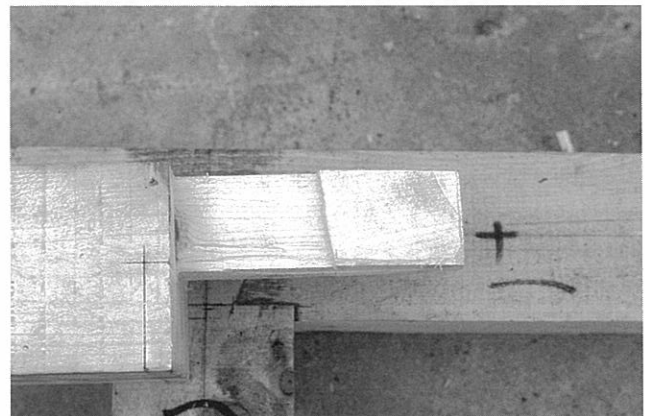
これは奥の小部屋から庭側を見たところです。塗回しの感じがよく分かりますね。

●鎌継ぎ



さて、重要な骨組みの仕口・継ぎ手を少し見てみましょう。これをなぜ、入れたかと言いますと、随所にこのような技が使われていて、腕のいい大工さんはこのような技をたくさん持っています。写真を見ていたら何枚か出てきましたので、2、3枚、持ってきました。

これは鎌継ぎ（かまつぎ）と言いまして、皆さんもごく普通に目にすると思いますが、ただ組まれたところを見ただけではよく分からない技です。次のもので分かります。

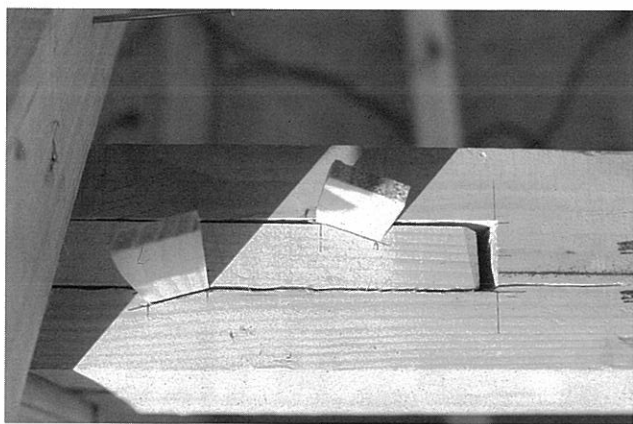


鎌の部分、ちょっと斜めに削ってありますね。これは

上からたたき込むと左右の材がぐんぐん寄るように、微妙な加工がされているわけです。組み立てられてしまうと分からなくなりますが、こういう微妙な技を、大工さんといわず、左官さんも、板金屋さんもいっぱい持っているものです。ですけども、今や発揮する場がありません。仮に自ら進んでやったとしても、設計者も分からなければ、建主も分からないというのでは張り合いがありませんね。

こうしたものは全部、手加工ですから時間もかかります。機械でやれば速いですが、今のところ機械では微妙なことは出来ないのです。斜めになっているというのがよく分かるでしょう。こういう技をちゃんと分かって、認めてやれる土壌がないと、職人技も恐らく育ていかないでしょうね。「1週間経ってもさっぱり進んでないなあ」などという程度の反応では、職人技も育ちようがないと思いますね。

●車知栓



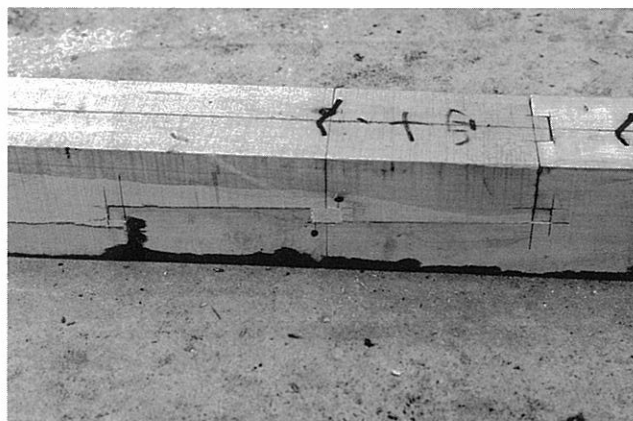
これも住まい塾ではごく普通に使っている継ぎ手です。車知栓（しゃちせん）と言って、梁（はり）と梁を柱に引き寄せるような場合に使うのです。ちょっとこれは分かりにくいのですが、2階の梁、要するに胴差し（どうざし）を通し柱に通しているところです。金物を使わないで柱に梁を緊結する方法の一つとして、昔からあるものです。2本、縦に打ち込まれているのが車知栓で、これはクサビ状になっていて、上からコンコン、コンコンと打ち込んでいきますと、梁同士のすきまがどんどん少なくなって、要す

るに梁が柱に引き寄せられていくわけです。クサビ状になっているのが分かりますね。

今の家づくりは忙しいですから数カ月で出来てしまいます。そういう家ですとボルト・金物をいろいろ使わなきゃならないわけですけども、いったんボルトで締めても壁をふさいだ頃には木材が乾燥して、ボルトが緩んできます。それをもう一回締め直す時間的余裕がありませんから、恐らく組み立ててからボルトはかなり緩んでいると言っているのです。

我々のやり方では木工事にかなりの時間がかかり、壁・天井を閉じる段階で木も相当乾燥して緩んでいますので、必要によってはもう一度、車知栓を増し打ちすることができます。ボルトだって増し締めできるわけですけども、まずほとんどやっていないのが実状かと思います。

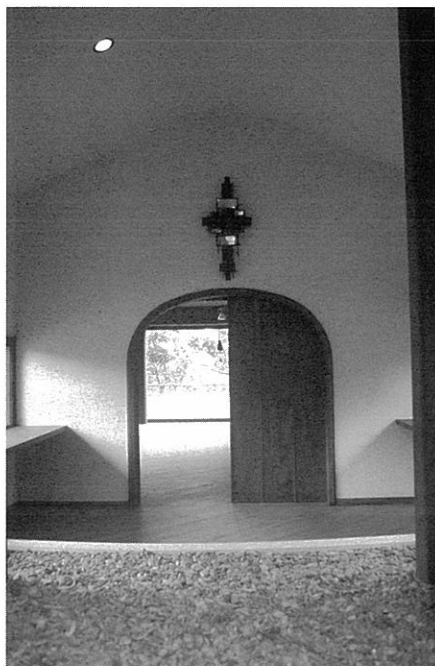
●金輪継ぎ



これを見ても皆さん、なんだかよく分からないと思いますが、これは金輪継ぎ（かなわつぎ）と言って、特殊な、最も手間のかかる継ぎ手の一つです。二本組み合わせていますが、縦に振ろうが、横に振ろうが、柱に使おうが、梁に使おうが、がっちり組み合わせられて一体化する、そういう継ぎ手です。これはさっき見た別荘とは違った現場でのものですけれども、ちょうど真ん中に2点黒いところがありますね、そこに栓が打ち込まれています。栓を打ち込む前に、左右にすきまができるように寄せてやって、その後、真ん中に栓を打ってやれば、全く一体化してしまうのです。

こういう技を持っている人はまだまだいるのですけれども、残念ながらやる機会がないのです。この大工さんは、今までよほど欲求不満の状態を続けてきたのか、不必要なところにまでこういうものをやっていました。そういう時代に今、なってしまうのです。

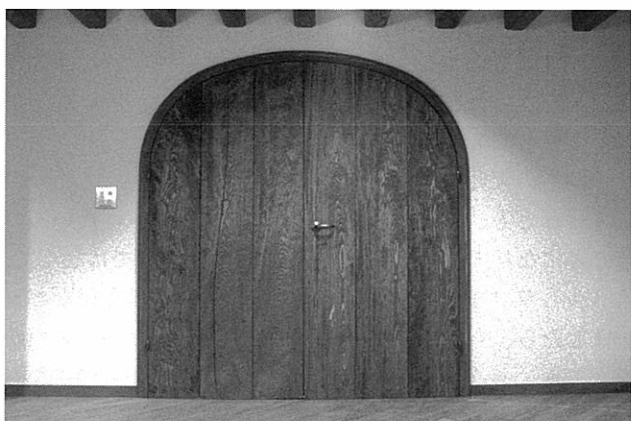
●完成までに足掛け3年掛かった屋久島の建物



屋久島には住まい塾の住宅が三棟建ちましたけれども、これは、屋久島第一号の建物です。これも「人が育つ」「職人が育つ」という意味で非常に思い出深い建物です。普通ですと1年ぐらいで出来る80坪ぐらいの建物ですが、これは結果的に出来上がるまでに足掛け3年掛かりました。建主と我々設計者の間で話し合った結果、「建築というのは地方文化の中核だから、少々腕が未熟でも、また時間が掛かっても、島内の職人たちにやってもらおう」ということになったのです。建主のTさんは当初自他共に認めるせっかちな人でしたけれども、深い理解を示してくれて、そういうことになったのです。そうは言われても今度は施工業者の方が心配しました。これぐらいの仕事をやれる大工さんは島内には一人しかいないとか、これだけの面積を

塗れる左官屋さんは島内では見つからない、とても無理だということで、鹿児島か宮崎から連れてくるといった話にまでなりましたが、施工業者に我々の気持ちを率直に伝えて、結果的には大工さんが一人と手元が一人、左官屋さんも一人にその奥さんが手伝うという形で工事が進みました。基本的に一人なので大工さんもくたびれ果てて、へばり気味になってはちょっと気兼ねな仕事をしに出かけて、また元気を取り戻して帰ってくるというような調子でしたので、結局3年掛かりになりました。結果的にはその後、この大工さんは大きな自信をつけて、今、屋久島の中で独立してりっぱに工務店をやっています。島内で最もいい仕事をする評判のようです。左官屋さんも最初はとても無理だと思っていたらしいのですが、時間が掛かってもやって欲しいということで、この人も大きな自信になったことでしょう。あれだけの面積をよくも一人で塗ったものです。これだけの面積を一人で塗るという経験は生涯二度とないでしょうね。ここの家は、主材に屋久島の榎(つが)を使いました。床も、柱も、造作も、建具も、榎の無垢材です。扉も二枚開きのかかなり大きいものですから、建具屋さんが「どうしても心配で作れない」と言ってきました。この人は種子島の建具屋さんです。屋久島にはさすがに建具屋さんがいなくて、隣の種子島から来てもらったのですが、割れても反っても、とにかく文句は言わないから、精いっぱい技で作ってもらいたいと言って、やっと作ってもらいました。





これがその扉です。ちょっと割れがきたりしていますが、別に実用上、支障はありません。

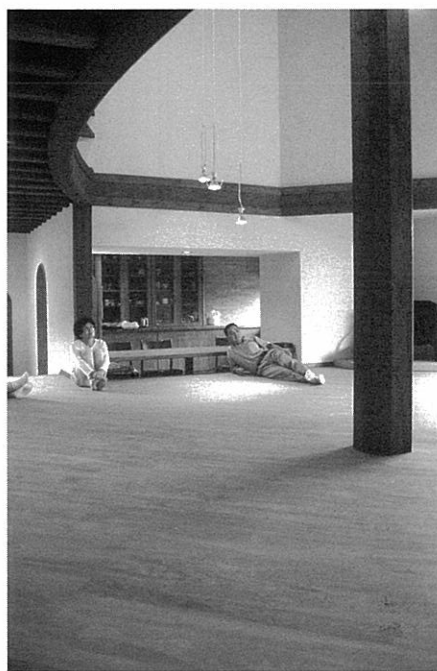
●「どうぞお下がりください」と言う玄関



ここの床は、斜め貼りにしています。それは、扉を開けて向こうを見た時……次のスライドで分かりますけれども、そこに薪ストーブがあって、それを斜めに置きましたので、その軸線に添って斜めに床を貼ったわけです。ここは、海岸線に向かって玄関からリビングへと下がっていき

ます。普通は玄関で靴を脱いで上がるんですけども、ここでは靴を脱いで下がるのです。ですから、ここの奥さんは「どうぞ、お上がりください」ではなくて、「どうぞ、お下がりください」と言うのです。(笑)

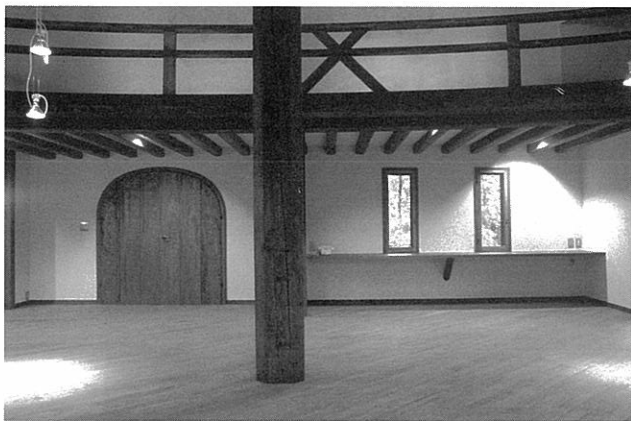
●「背割り」をしない柱



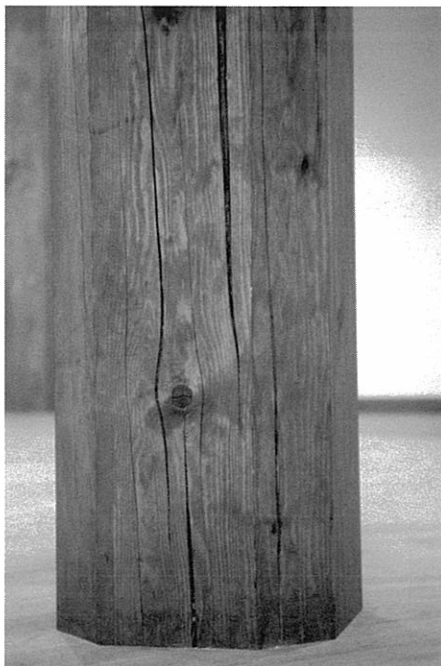
これはリビングの大きな扉を開けると、「こういう空間になっています」という写真です。ここの真ん中の柱は確か36cmあったと思います。心持ちで真ん中に年輪の芯がありますので、ばんばん割れます。日本人は割れるのを嫌い、



ある面に樹心まで1本、鋸（のこ）目を入れて、そこに割れを集中させる「背割り」という手法を昔から使ってきましたが、どうも私は以前からあの作為が好きになれないのです。ですから、「割れたら、割れたでいいじゃないか」と背割りは入れていません。



●「やってみるといいもんだね」、
柱の割れ

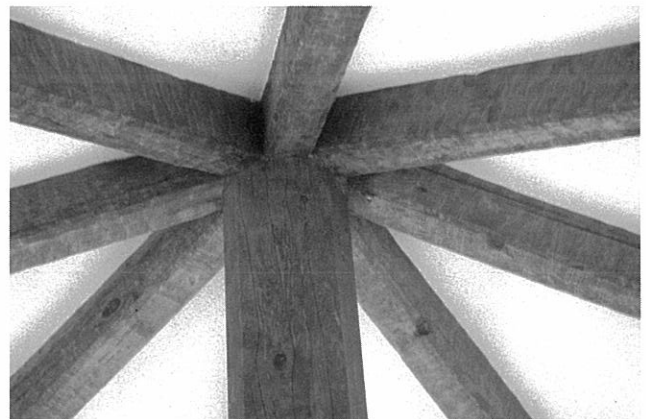


背割りを入れないと大径木特に心持ちの柱はこんなふう

になるわけです。大工さんはこういう現象を嫌がるんですね。ですけれども、「今までは割れてはいけなとばかり思ってきたけれどもやってみると、それなりにいいもんだね」と言っていました。

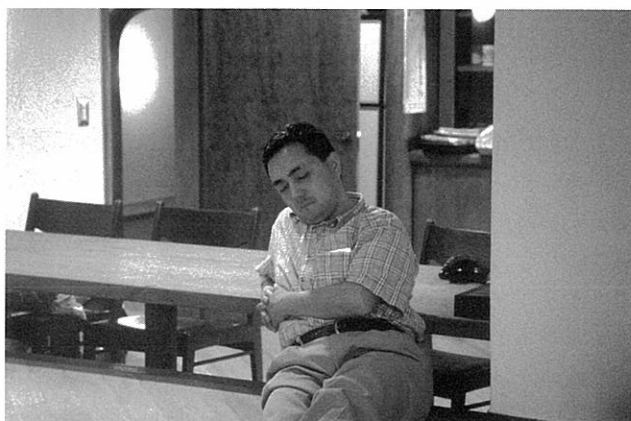
八角形の天井の隅に梁のようなものが8本入ってくるのですけれども、それを手斧（ちょうな）で仕上げたいということになりました。ただ、つるんとしたものでなくて、もう少しラフな感じに仕上げたいので、手斧はないかと言いましたら、もう20年も使っていないが、昔使っていたからどこかにあるはずだと小屋を探したら、使いものにならないような手斧が出てきました。それを持ち出して、梁をちょんちょん、ちょんちょんとやったのですが、何せ柄が伸びきっているのですから、きれいにはつれるわけがない。うまくいかなかったけれども、でもまあ、つるんとした梁よりは味わいがあるように仕上がりました。

●手斧で仕上げた8本の梁



「ちょんちょん、ちょんちょん」大工さんのやったのが何となく分かると思いますけれども、この梁は写真の印象より実際はずっと大きいものです。それにしても屋久島の大工さんの馬力には恐れ入りました。1トン近くあるような大梁をほとんど人力で持ち上げるのですから…。ああいう野性的な力というのは、ちょっと都会では考えられないですね。森の中ですし、機械も入らなかったのですから。

●仕事を終えて



この写真の人は施工業者の社長で、やっと完成して疲れ果てて寝ているところです。(笑)
スライドは、これで終わりです。

●家を建てる人が、どういう「思い」で、家づくりに臨むのか

これまで話とスライドを見ていただきましたけれども、何かが変わるといのはただ一人で頑張っただけでなく、いろいろな人が絡んで「ものが変わっていくのだ」ということを、少しは感じていただけたのではないかと思います。

建築は専門家の手によるものだし、専門家であるあなた方が頑張れば、いいものも出来るし、事態も変わるのだ、とこう考えられがちですけれども、やはり家づくりの中心は建主であって、その人が家というものに何を求めているかが周囲に大きな影響を及ぼしていくのです。職人たちが変わっていくというのも奮起させる何かがある話であって、その状況をつくる中心はやはり建主なのです。

工務店や職人一人ひとりに「頑張っ、そういう状況をつくりなさい」と言っても、これはなかなかできないことです。ですから、やはり共同の土壌づくりとか、変わっていくだけのものづくりの土壌を準備していくということが大切になってくるんですね。

設計者が変われば事態も変わっていくということは確か

すけれども、日本の設計者たちは慌ただしい社会に組み込まれて、そんなのきなことをなかなか言ってもらえないことになりました。しかし、そうした中であっても、質的転換を図る上で設計者たちの果たすべき役割・責任は、連鎖的に周りの人も変わっていくことのできる状況を生んでいくという意味で大きいのです。

職人は「いい仕事に恵まれない」とよく嘆きますが、いい仕事に恵まれないということは、後継者も育てる気になかなかないということですね。「職人のなり手がいない」とも言いますが、現に今やっている職人が生き生きと生きられないのに「後継者を育てる」も「職人のなり手がいない」もないでしょう？

長く一緒にやってきた奈良の大工さんは、年の3分の2ぐらいは住まい塾の仕事を継続的にやっていますけれども、これが2年に1棟とか、3年に1棟といったことになれば、恐らく後継者は育てられないと言います。苦勞して育てたとしても腕を振るう場がないわけですから、そういう人を育てると言っても無理だと言うんですね。「求める人」がいて、「それに答える人がいる」というバランスの中で、はじめてものづくりの場が出来てくるわけですから、このバランスをどうつくり出していけるか、ということが具体的な課題となるのです。「応える人」はまだ潜在的にいますけれども、「求める人」がいない時代になった……しかし、本当は求めている人が潜在的にいると考えるべきなのです。

●特注でも、不可能ではない「家づくり」

「住まい塾」の住宅を見ると、こりゃあ金持ちでないと思えないと思う人がたくさんいるようですけれども、実際につくった人の話を聞いたりしているうちに、「私にもできそうだ」と気持ちになってきます。

既製品に慣らされてきましたから「特注でものを作るのは不可能な時代だ」と、みんな思い込んでいるのです。けれども、実際にはそれほど困難なものでも高いものでもありません。無駄に高くなるのは作る人から住む人に渡るまでの間に、本来あまり必要のない立場の人が幾重にも入っているからなのです。

作る人と使う人の直接の関係でものづくりができれば、不

可能なことはそんなに多くないはずですが、安くはないかもしれませんが、皆さんが考えているほど困難なことは決してありません。“無理だ”という先入観を捨てて取り組んでいけば、可能性はどんどん開けていくように思います。

先週、私は関西にいたんですが、京都のある人が家を建てたいと言うのです。5年前にあるハウスメーカーに頼んで、家をつくったんだそうです。どうして住まい塾を知ったか分かりませんが、特に奥さんが「5年前に建てた家がもう嫌になった」と言うんです。ダンナは「こりゃあ、えらいことになった。住まい塾の建物を見なきゃ、こんなことにはならなかった」(笑)と。

人の感覚ってそれぐらい一瞬にして変わるんですよ。話だけでは、一瞬にして変わらないですよ。私がこんなにしゃべっても、二日後には話の内容などすっかり忘れていて、ことはあっても、「あの話で突然に、私は変わった」などということはあるんです。しかし、実際モノに接しますと一瞬にして、しかも大きく変わります。昨日まで住宅展示場に行って、あれにしようかこれにしようかと迷っていた人が、突然に興味を失うぐらいに変わりますね。これは変わるというよりも、潜在的に自分の内に持っていたものに気づくってことなんだろうと思いますけどね。

●愛着のわく家とは

以前、40坪ぐらいの家を一軒つくるのに、木の生命として「何年分ぐらい費やすかな」と思い、計算してみたことがあります。住まい塾の家は、単位面積当たりの木材の使用量が普通の木造住宅の倍近くになりますが、試算の結果、3千年から4千年分の木の命を費やすことが分かりました。それだけの命をつぶして、やっと一軒の家に蘇らせる



のですから、そんなことを考えますと、そうそう気楽に構えちゃいけない仕事だな、と思いますね。

営業マンがそそくさとやって来て、早く契約を済ませて、あとは2、3ヶ月で出来上がる時代ですが、住む方は「早く出来た」と喜んで、その揚げ句に5年もしないうちに飽きが出て、20年も過ぎたらそろそろ建て替え時期というわけです。寿命20数年と言いますが、昔と違って老朽化によってつぶす家は今どきほとんどないですね。みんな、建っているのに壊すのです。それはなぜなのでしょうね。私はこれを、強度上の問題ではなく、愛着の問題だと考えているんです。日本の住宅が短寿命である最大の原因は、きっと愛着がわからないということでしょうね。決して構造的に弱いからではないのです。長く住みたいと思えなければ短寿命に終わりますからね。住宅の耐久性のファクターは、いまや完全に構造強度から愛着の問題へと変わってしまったと言ってもいいと思いますね。子供が大きくなって部屋が不足だ、改造にも結構お金がかかるし、いっそのこと建て替えようか……と、こんなふうになってしまうのです。

愛着のわく家をつくるには、どうしたらいいのでしょうか。日本ではどうも「長寿命住宅」とか「高耐久性工事」といった言葉で「構造強度を増せば、丈夫になって長持ちする」と単純に考えられているところがありますが、丈夫につくっただけでは長持ちはしないのです。今のような性質の家では住む人が、みんな飽きるのです。飽きのこない愛着のわく家というのは、どういう要素によっているのか、と考える必要があるのです。純粋に建築的な要素・構造がしっかりしているのも一つの要素には違いありませんし、造形的にいいとか、空間がいいとか、素材の問題も大きいですね……それに加えて住まいづくりに「どういう人」が、「どういう思い」でかかわったか、といった要素もかなり大きいのです。私が今、住んでいるのは江戸時代の商家です。私はどういう人がこの家をつくったのか全く知りませんが、当時の棟梁以下職人たちは平成の時代になって私が住むなんてことはもちろん予想すらできないわけです。でも、当時どういうふうな思いでこの家がつくられたのかは、肌で感じられますね。そういうものがなかったら長持ちしないでしょう。そもそもこんなものづくりのスピードで愛着のわく家が可能なか……と問うことだって大事です。この“スピード”の問題は表面に出ないさまざまな問題をはらんでいると私は思っているのです。建築的な要素の中でこれ

まで素材の問題をとにかくうるさく言ってきたのですが、「テカテカの床材で、壁・天井はビニールクロス」というのでは、いくらホルムアルデヒドが出ないと言われても、だんだん味わいが増えてくるというわけにはいきませんね。この素材の問題は愛着の問題と絡んで、極めて大きな問題なのです。そういうことも含めて「愛着のわく家は、どのようにして成立していくのだろうか」と考えていけば、生活者のみならず、職人やものをつくる人たちが育っていく土壌も自然に整備されてくると私は考えるのです。

今は、時間をかけていい仕事をしたくても「早いに越したことはないんだよ」などと言われる時代です。これでは、育とうにも、育ちようがないじゃありませんか。ともかく、それを許容する土壌、もっと積極的には「求められる土壌」がなければ、つくる方だって応えようがありませんね。この求める人をいかにして増やしていけるか……これは、私のずっと抱えてきた問題ですね。それを、どのように具体化していくか、住まい塾の活動はそこにかかっていると書いても過言ではありません。

質 問

■司会 秋山氏

どうも、ありがとうございます。熱心にお話をいただきましたので残り時間がなくなりましたが、ここで質問を受けたいと思います。若い方、学生の方も大勢来ていただいていますので、せっかくの機会ですから質問してください。それから、外部の方とか、先生方も何か、ご質問はありませんか。

■質問 丸山詠子氏 (当時:近畿能開大校附属 滋賀職業能力開発短期大学校、現在:同大学校附属 京都職業能力開発短期大学校)

滋賀短大校の丸山と申します。私は、今左官屋さんを中心におつき合いをさせていただいています。職人さんの話では、お客さんや一般の人たちが「現場を見てくれる機会が、極端に減っている」と言うのです。「現場が網で囲まれていて、自分たちの腕の見せ場がなく、誰も見てくれな



質問をする丸山氏

い」、それで「出来たものだけに評価がいつ、自分たちの腕の見せどころが減ってきているので、そういう部分を見せる機会がぜひ欲しい」というのが一つと、もう一つは「教育訓練の中に左官とか、建具とか、板金とかが省かれているので、ぜひ、そういう部分を教育の方にも入れて欲しい」と言っています。そういう現場のこととかは、どうされているのでしょうか。

■回答 高橋氏

●住まい塾には、職人に「思いを語る場」「技を見せる場」がある

教育機関で全てをやることは難しいですから、外の、例えば住まい塾でもいいですけども、そういうところに足を運んで広く学ぶということは大切なことだと思います。社会には連携して学べる場所がいくつもあります。教育もそのようになると思いますね。

そんなに度々見る機会はありませんが、住まい塾には工事途中、それから完成した時にセミナーという形で見学会があります。技には長けた職人でも、話すことは苦手だという人が多いのですが、経験を積んだ人の話というのは、とつとつとした話でも大事なことは伝わってくるものです。ですから、毎月の勉強会や、さまざまな立場の人が数百人も集まる現場のセミナーでも、職人に経験や思いを語ってもらいますし、時には技を見せてもらったりします。そうすると人は随分変わりますね。家を建てる人も、何せ工事

期間が長いのですから、工事途中でも関心を持って、じっくり見ることができます。家をつくる過程で、本当に大きく変わることが珍しくありません。以前はそんなに関心を持っていなかったのに、「職人の仕事というのは本当にすごい！」なんて言い始めるようになります。こういう関係になってくると、お互いに関心を持ってきます。職人だって張り切るでしょうね。何をやっても無反応というんじゃない。しかし、実際に見ないと変わらないのです。見て、触れて、直に聞いて……これが大切ですね。

去年は、土壁の実習で泥と藁わらを持ってきて、やってみると泥をこねるだけでも大変なのです。1軒分となったら途方もない力仕事ですからね。別に何かに役立てようってわけじゃないんです。左官屋さんは軽々と塗りますが、実際に自分で塗ってみるとうまく付かないし、重くて疲れてはくるしね。“ハァー、左官屋さんの仕事って大変だなァ……”これでいいんです。今は土壁を塗る人は関東ではほとんどいなくなりましたが、住まい塾の標準的な構法で1軒にどのくらいの重さが付くものだろうかと計算してみたのです。計算してみても私はびっくりしました。乾けば軽くなりますけれども、土壁でなくとも何十トンという単位です。それを左官屋さんはひたすら塗り込んでいくわけですから、それを聞いただけでもすごいものですね。

●家づくりにかかわった人に見てもらいたい完成後の家……自分の担っている役割を実感することが重要

建具金物の製造過程を見に行ったりしても、こんな時代だから近代的な工場ではかばかば量産されているのかと思えば、

いい金物はいまだ手仕事なんですね。我々が使っているのは、量産型のアルミとかステンレスのプレスものではなくて、真鍮の鋳物が中心なのです。この製造工程を追って見たのですが、鋳型屋さん、鋳金屋さん、それから研磨屋さん、洗い屋さん、メッキ屋さん、みんな違う小さな町工場なのです。「真鍮の鋳物の金具は、時々乾拭きしてください」と言われると、見ない人は「いちいちそんなこと、してられないよ」とか、値段も「随分高いものですね」とか言うでしょうが、あれを一度でも見たら、まず、そんなことは言えなくなると思います。作った人の気持ちがすぐくめましますからね。設計者も建具屋さんもユーザーたちも一緒に見に行きましたから、こんなに大勢で工場を見に来てくれたのは初めてだ、ということで工場の人たちといろいろな話をしました。私は、住宅が完成したら、完成祝いにこういう建具の金物を作っている工場の人にも、できるだけ来てもらいたいのです。そうすると、工場の方は、自分は建具金物をひたすら作っているだけで、自分の世界はこう……小さいものだったけれども、「建築という大きな世界の中で、大事な役割を自分は果たしているんだ」と感じるようになって、光が差し込んだみたいにその人の表情は生き生きしてくるんですね。

何か、みんな商売がらみで、「あなたは、それだけやっついればいいのだ」式になっているのは問題ですね。いくら分業制が社会的に効率がいいと言ったって、人間を金を製造する機械のように考えて、“建築を見に行くなんて金も時間も無駄だ”なんて発想を持っていたんでは、人間は人間らしく働けないし、育ってもいけませんね。石屋さん、レッカー屋さん、土工も、建築をつくる上でいろいろな人が役割分担して、結果的には「全員でこういうものを作り上げているんだ」というイメージが、今各人の中にはないのです。

基礎屋さんは基礎工事だけで、完成したものを見ることもなければ関心もない。工務店も気を利かせて見せたりすれば



いいのですけれども、足元にばかり忙しくてそんな必要性も感じないんでしょうね。これじゃあ分業制じゃなくて単業制だ。完成をみんなで確認して「喜び合う」「祝う」ということは、とても大事なことだと思いますね。我々がつくっている住宅ですら、うっかりすると棟梁さえ完成した最後の姿を見ないかもしれません。修理だってあるだろう、と言いますが、修理には別の大工さんが来たりする……だって、棟梁は一軒の大工工事が終わると、別の現場へ行ってしまいうんですから。手直しがあって初めて完成の姿を見るなんてこともあるかもしれません。“ハハア、こんなになったのかア”なんてね。東ねる人にも責任があると思いますよ。完成したら「みんなの力で、こういうものが出来たんだ」ということを見て、それを実感し合うという場が、今はほとんどないのです。左官屋さんは左官塗ったら「はい、次の現場はあちらです」……。左官屋さんは「左官を塗る人」なのです。建築をつくっている一員だという実感が、今ひどく希薄ですね。家をつくった人が呼んでくれなきゃ仕方ありませんが、我々は極力、完成したら集まれるようにしていますが……。

■司会 秋山氏

あと1件くらい何か、ご質問はありませんか。

……質問がないようなので、私のほうから質問させていただきます。

学生さんは、まだ勉強途上で、このあと社会に出て行くわけですが、これからどういうことを心掛けて勉強していけばいいのでしょうか。

■回答 高橋氏

●願いを持って「自分のあり方が状況を変える」という気持ちが大切

私も勉強途上ですからそういうことはよく分かりませんが、私でも（笑）……ただみんなに考えてもらいたいことはあります。

それは若い人に限った話ではないのですけれども、これほど目に輝きのない国はないとよく言われますね。目が

「どよーん」としているのです。年をとれば目の輝きが失せるのは当たり前と思われているから「若者に輝がない」と言われるのですけれども、実は大人も相当に輝がないのです。目だけならまだいいんですが、どこか大事な芯の部分がどよーんとしているんじゃないか、ということが気がかりなのです。これはいったい何なのだろうと思うんですね。何か日本は、経済的には成熟したというか、成熟したとまではいなくても、まあ裕福になったから、「とりたててやりたいこともない」「一人でジタバタしたって大したことになりやしない」なんて思っているんじゃないかな。「何をやっても世の中変わらない」といった雰囲気はどうもありますね。でもまあ、世の中はどうでも自分の回りぐらいいは、何かやりやあ、何かが変わるでしょう。まずそこから、いつでもそこから、じゃありませんか。それをいきなり社会だの、世の中だのと考えるから自失呆然となるんじゃないかな？ どれくらい変わるものかは分からないのですけれども、とにかく一人が何かをしたら5人、10人変わるし、5人、10人変わったら、連鎖でいろいろなところが変わっていきます。

住まい塾の設計者集団には設計者が20数人いますが、ここが変わってくると、まず建築そのものが変わってくるでしょうし、関連する職人たちも確実に変わってくるでしょうね。そうすると、家を建てた人たちにも影響が及んで、何か変化が生まれてきます。自分の経験を人に語るようになって、また何かしらの影響を周りに与えていくことになるでしょう。住宅一つだって大きな影響力を持つんです。

去年ある病院の事務長さんが我々のところで家をつくったのです。この人は食事もぜいたく、旅の宿もぜいたく、とにかくぜいたくな生活をしてきた方でしたが、家が完成



し、移り住んでから「生活実感として、本当に自分の生活が変わった」と言うのです。「いい物を食べに行きたい」とか、「いい店で料理を食べたい」とか、「いい旅館に泊まりたい」とか、そういうことがだんだん少なくなってきたと言うのです。家にいてゆっくりするのが一番いいと。まあ、1、2年でまたぶりがえすかもしれませんが。(笑)

家を建て替えたことで何かが変わったのです。その生活実感の変化ぶりを、人にまた話しますね。その後、病院を建て替える計画があってその場面で、また変わってくるのです。自分の家が替わったことで、通常の今の病院は本当にひどいと実感されるようになったんじゃないでしょうか。その病院には老人が多いし、そこで一生を終える人も少なくないんです。今度建て替える病院は、人生の最期をそこで送っても、「あそこは良かった」と感じられるような病院にしたいようになってきた。そんなふう思うかどうかは、元々のその人の人間性にもよりますけれども、そんな思いを院長さんと話すようになりますね。

今はどこに行っても収容所みたいな病院が多いのですね。6人部屋だの、カーテンに仕切られて長く入院していたりして、それが当たり前になっていますね。患者さんは我慢しているけれども、ああいう状況は住宅の貧しさが下支えしているんだと思うんですね。そうでなきゃ、今頃暴動が起きてますよ。

私は院長さんに聞いたんですよ。「立場を変えて、もし院長さんが入院するとして、あの6人部屋のカーテンで仕切られた病室に長くいたいと思います？」……「いやあ、いたくないですねえ…」(笑)

何か一つが変わると、このようにいろいろな場面で目に見えない変化が起きてくるのです。日本は確かにどことなく腐り始めて、あまりやる気も出ないところがありますけれども、

「夢を持ってない時代になった」なんて、大して生きもしないうちからそんな分かったようなことを言わないで、夢を持たなきゃ、願うぐらいは持って生きていって欲しいですね。だってね、みんな批判しているこの状態は、あるいは自分がつくり出しているものかもしれないんですからね……。

「住まい塾」にはいろいろな人が集まって来ます。中にはお金中心のこの世の中に嫌気がさしてやって来たなどという人もいるかもしれません。来てみて逆にお金中心の昔がかえって良かったなんていう人もいるかもしれませんが、(笑)それでも結構みんな、それぞれ問題を抱えながらも何かの願いを持って前向きにだけは生きている……ようです。

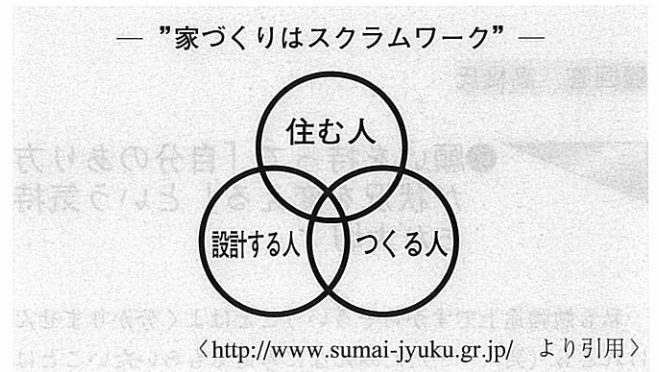
閉 会

■司会 秋山氏

まだまだ、いろいろとお話をお聞きしたいところですが、予定の1時間半を超え、20分あまりも超過しましたので、ここで終わらせていただきたいと思います。

今日は、「住まい塾」で実践されている実例をもとに、哲学的な内容などを交えて、いろいろと示唆に富んだお話をいただきました。非常にインパクトのある、元気の出るお話であったと思います。

これで、特別講演を終わります。どうも、ありがとうございました。



企画：秋山恒夫、テープ起こし：田島幹夫・新野信夫
ビデオ記録：小川和彦、写真・構成・編集：新野信夫

